あすなろ通信

学校配信用

NO. 39

平成２５年１月１６日
発行元　あすなろ会
代表　須田敏男（岩野田小）

差別やいじめを作り出しているのは、私たちかも

（褒め言葉・叱り言葉に注意を払わないと・・・・大変なことになる）

いじめが社会問題となり、教育現場でも喫緊の課題と捉えています。そして、私たちは、日々子どもたちに差別やいじめを許さない態度で臨んでいます。そこで今回は、この差別やいじめの問題を脳のはたらきから考えてみました。

「差別やいじめは許さない。」・・・これは、意識レベルでの話です。問題は、無意識がこれに協力してくれるかどうかにかかっています。意識と無意識を比べると無意識はかなりパワフルです。学者によっては、その力の比は、意識：無意識＝１：２００００とも言われます。

無意識は、価値観とは無関係で、自身の安心・安全のためにはたらきます。

ですから、差別やいじめを意識レベルで許さないと決めても、無意識レベルで差別やいじめが容認されれば、差別やいじめをなくすことは、できません。無意識は、とても厄介です。意識で正しいことをしなければならないと思っていても、無意識は、平気で嘘をついたり、ごまかしたり、困らせたり、だましたり、時には隠したりします。

例えば、無意識が親から離れたくなくないという立場をとると、意識で学校に行かなければと思っていても、病気になったり、登校を拒んだり、親から離れないような動きを作り上げるケースがあります。

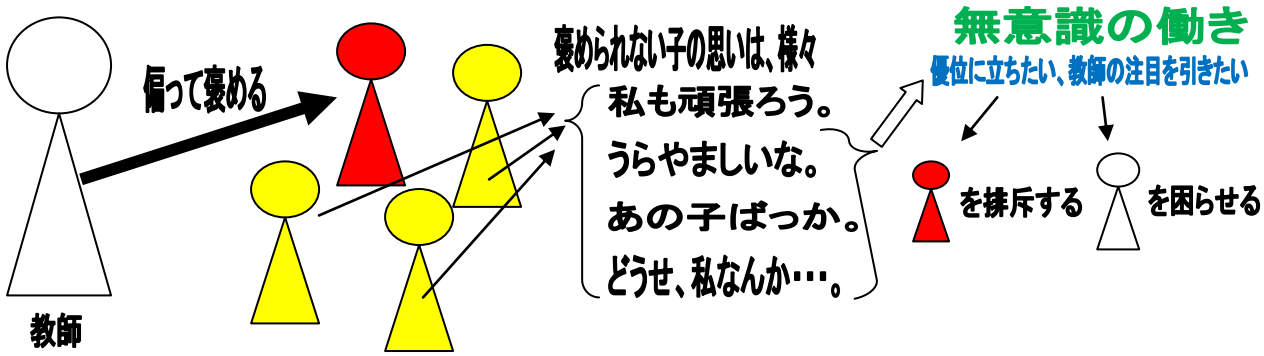
これを差別やいじめの問題に当てはめて考えてみます。（よいと思ってしていることでも、私たち教師の対応によっては、差別やいじめを生み出す危険性があるということに気づきました。）

無意識は、自身の安心・安全のためにはたらきます。ここがポイントです。

私たちは、子どものよさを見つけて日常的に子どもを褒めています。その裏には、**「どの子も大切な子だ。どの子にもよさや可能性がある。」という構えがあります。この構えならば、どの子も認められ、承認される環境となり、無意識は、安全・安心を確保できるので、いじめを生むことはありません。**

しかし、　・教師も人の子だ。好き嫌いがあっても仕方ない。
・何十人もいれば、１人ぐらいは、合わない子がいても仕方ない。
・褒める子、叱る子が、かたよっても仕方ない。

などと、私たち教師自身の中に、子どもを区別する姿勢があれば、差別やいじめを生む危険性があります。



図のように、褒められない子の中には、無条件で褒められた子を教師と同じように賞賛する子ばかりではありません。「うらやましいな。」「あの子ばっかり」「どうせ私なんか。」など賞賛しない姿も生まれます。

認められないが、何とか先生の注意を引きたいと思えば、無意識は、先生を困らせたり、いたずらをしたり、あらゆる手を使って、注意を引こうとします。無意識的ですから、意識してやっているわけではありません。

そして、ここから、褒められる子を差別やいじめの対象とする可能性も生まれます。自分が優位になるためには、弱い立場を作ることになります。そのためにいじわるをしたり、無視したり、いたずらをしたりと自分が優位に立つためにあらゆる手を尽くして、パワフルに働きます。

「差別ではない。区別だ。」といくら言っても、無意識はその区別ができません。どの子も大切な一人です。子どもに対する思いに差を作るのは、教師です。その思いの差の中に、差別やいじめを生む可能性が隠れています。